

聖書:創世記6章9～22節

説教:家族とともに箱舟に入りなさい

はじめに

この教会では、感謝なことに子どもたちが加えられてきております。今はコロナウィルスのことがあるので礼拝に来ることは難しい状況ですが、でも落ち着いたらやがて子どもたちは帰ってきます。その子どもたちにも教会はイエス・キリストを信じる信仰を伝える責任があります。では具体的にどうするのか。特に、子どもたちが礼拝に参加することについては、いろいろな意見がありますから慎重でなければなりません。このようなときはまず聖書に立ち戻り、聖書では子どもの信仰継承についてどのように語っているのか、まずそこに耳を傾け、次に聖書を土台にして具体的ことを考えていく。そのような順序で進めたいと考えています。

そこで本日から六回シリーズで、ノア、アブラハム、モーセ、ヨシュアを通して神が語られたこと、そしてシリーズの最後にイエスが語られたことを見ていく予定です。今日はその第一回目として創世記に登場するノアを取り上げます。子どもへの信仰継承とノア。どこが関係あるのだろうかと思ふ方もいらっしゃるかも知れませんが、少しずつ内容を見てまいります。

1 さばき

1) 自分の道を乱していた

まずノアが生きていた時代の様子から確認します。11、12節。「地は神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、見よ、それは墮落していた。すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していたからである。」

神が地上に洪水をもたらさなければならなかった理由は何であったか。「すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していたから。」と書いてあります。では、「道を乱す」とはどういうことか。具体的な事は書いていませんが、ヒントがあります。「乱す」ということばと「暴虐」と訳されていることば、調べると同じことばが使われている。それだけではない。もう一つあって、17節で「私は、今、いのちの息あるすべての肉なるものを天の下から滅ぼし去るために」とあるなかの、「滅ぼし去る」、このことばと同じ。

2) さばきの理由

そうしますと、12節はこうも言い換えることができる。「すべての肉なるものが、地上で自分の道を壊していた。」「乱す」というと、間違いに気がついたらあとからでも元に戻すことができる、そのようにもとれますが、そうではない。ガラスの皿を床に落として割ってしまったら元に戻らない。それとおなじように人々は修復ができないほどに自分の道を壊している。主の目にはそのように見えました。5、6節に、そのことがもっと詳しく書いてあります。「主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」

神が人を造ったことを悔やみ、心を痛められるほど苦しんでいる一方で、人はどうであったか。自分が本当は何をしているのか見えていません。「悪いことさえしなければ、人は自分で選んだ道を自由に選ぶ権利がある。他人から指図されたくない。だから宗教は嫌いだ。」私もかつてそう言っていた人間でした。ノアの時代も今も変わりません。

2 救い

1) 箱舟

しかし神はどうされたのか。神がすべてのものを滅ぼしたということであるなら、そこで話は終わりです。ところが続きがある。14節「あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。」

こう語ってから、箱舟の具体的な設計図を非常に詳しく示します。実際にこの箱舟を作った方がオランダにおられて、仲間と協力して四年以上かけて作ったそうです。写真で見ると実物の大きさにびっくりします。ノアの時代はいまのような便利な道具はありませんから、完成まで十年単位でかかったのではないかと想像します。

2) 救いの道

神はなぜこのように大きなものをわざわざ造らせたのか。不思議です。というのは、先ほど神が語ったことばと矛盾するからです。13節後半。「見よ、わたしは彼らを地とともに滅ぼし去る。」ところが14節ですぐにこう言われる。

「あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。」。

私たちの目には不思議としか見えません。でももし神がすべての罪人をさばき、滅ぼして終わり、箱舟という救いの道を備えてくださらなかったなら、私たちはここにいなかった。人は、自分勝手な道を歩んで、結局自分の大切な道を破壊し、永遠の死というさばきを受けなければならない者であったのに、神はさばきの中から逃れることのできる道としてノアの時は箱舟を備え、そして今は私たちのためにイエス・キリストの十字架という道を備えてくださいました。

いまコロナウィルスで世界は今まで経験したことのない混乱の中にあります。これは神のさばきではないのかと考える方もいるかもしれません。そうであるのかどうかは私には分かりません。でも、ただ一つだけ言えることがある。どんなことが起きても、どんなことを耳にしても、たとえ目の前に死が迫ってきても、私たちはこわがることはない。なぜなら私たちはすでにイエス・キリストによる救いの約束をいただいているからです。

3 箱舟に入る者

1) 信仰者ノア

次に見たいのは、暴虐の時代にあって救われたのは誰であったのかです。18、19節。「しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは、息子たち、妻、それに息子たちの妻とともに箱舟に入りなさい。また、すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつを箱舟に連れて入り、あなたとともに生き残るようにしなさい。それらは雄と雌でなければならない。」

そもそもノアが箱舟に入ることが許されたのはなぜであったのか。8、9節にあります。「しかし、ノアは主の心にながっていた。これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中にあって全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」

ノアの時代、ほかの人々の心はいつも悪で満ちていて自分の道を乱すような生き方をして高慢になっていたとき、ノアだけが正しい人で神とともに歩んでいた。だから彼が選ばれた。こう聞くと多くの方はがっかりするでしょう。「正しい人でなければ救われないのか。私はだめだ。」

でも正しい人とは何か。彼には罪がなかったということなのでしょう。そんなはずはありません。彼もアダムの子孫です。では、生まれながらに

罪人であったノアがどうして救われたのか。なぜ彼は「正しい人」と呼ばれたのか。

イエスはなんと仰いましたか。ルカの福音書18章13、14節。「一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

イエスはどんな者が救われると教えてくださったか。自分は正しい、間違ったことはしていないと言ひ張る者ではなく、むしろ自分は間違っている、神の前に立つことなどできない罪人であると自覚する者こそが救われていく。これが聖書の原則です。ノアもそうでした。

2) ノアの家族全員

それでほかに誰が箱舟に入ったのか。18節。「しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは、息子たち、妻、それに息子たちの妻とともに箱舟に入りなさい。」

ここで目を留めていただきたいことが二つあります。一つ目。神が救いの契約を結んだのは正しい人と呼ばれたノアただ一人であったこと。そして二つ目は、ノアとの間に結ばれた救いの契約のゆえに、ノアの家族が箱舟に入ることを許されたこと。この二つのポイントは私たちに大切なことを教えています。ノアという一人の信仰者の信仰によって、ノアの息子たち、妻、そして息子の妻たちが救われて箱舟に入るようになった。神はそうにして家族単位で救おうとされている。同じことは7章1節にも書かれています。「主はノアに言われた。『あなたとあなたの全家は、箱舟に入りなさい。この世代の中にあって、あなたがわたしの前に正しいことが分かったからである。』」

3) 礼拝に招かれている者たち

もし神が、ノアの家族に対して「あなたはまだ小さいから」とか、「信仰告白していないから」という理由で箱舟には乗せることはできませんと言ったらどうしますか。それでもノアは喜んで箱舟に乗ったでしょうか。そんなことはないでしょう。自分が愛する家族も一緒に箱舟に乗せて欲しい。そう願うのは当然です。それで神は、そのようなことにならないように、最初からノアの信仰によって家族全員が救われるようにしてくださったわけです。

このことは私たちにとって大きな励ましです。皆さん一人だけが救われているのではない。皆さんの家族も一緒に救われていることになる。そんな中で私たちは信仰を証して歩いていくわけです。

最後に考えます。そうしますと、いったいだれが礼拝に招かれていることになるのでしょうか。もちろん救いをいただいている人が招かれる。しかしそれだけではない。皆さんの家族も招かれている。子どもたちも招かれている。救いを求めている人たちが招かれている。そこに何か差別があるわけではありません。

こう考えていくと、私たちがいただいている救いの恵みがどれほどに豊かで想像をはるかに超えた広がりをもっていたことに気がつきます。改めそのことを思い起こし、主に感謝いたします。